

# マスクのお返しに…

加納 桂子

新型コロナウイルスの感染が広がり始め、どこを探してもマスクがなかった頃のことです。

我が家の不織布マスクも残り少なくなり、消毒洗浄して再利用していました。私は少しでも汚れを減らそうと、マスクの間にキッチンペーパーを挟んで着用していましたが、息がし辛く大変でした。

ある日、女性ご利用者様宅へ送迎に行った時にご家族様とマスクについての話になり、その中で私がキッチンペーパーを挟んでいることを伝えました。すると、別日の送迎の際、そのご家族様より「待ってたの。これだと息も楽よ」とマスクに挟む専用不織布1袋を手渡されました。

ネットでも店舗でも売り切れている商品、頂けないことを何度もお断りしましたが、貰って欲しいとのことでした。私は感謝の意を込めて「お母様への愛情でお返しさせてもらいます」と伝えましたが、言った直後失言したと後悔しました。本心からの言葉でしたが、失礼な冗談に聞こえなかっただろうか。

しかし、ご家族様は「本当にお返しなんていらないけれど、母へ愛情を向けてくれるのが家族として一番うれしい。それでお願いします」と仰ってくださいました。

私たち職員に向けてくださる優しさと思いやりに感動したできごとでした。



# 時間を超えた「お互いさま」に感謝

ペンネーム JB64

今年の冬。平成30年豪雪ほどではないものの、山間にある私が住む集落でも相当の積雪がありました。

80歳を超える母と障がいのある妻との3人暮らしの中で男手は私一人。降雪時の屋根雪や玄関周り、駐車場の除排雪は身体的にも精神的にも負担が大きい作業になります。特に、出勤後の職場の除雪にも対応しなければならぬ日もあり、そんな日は家の除雪はとにかく後回しになるため、母と妻には屋内でじっとしてもらおうしかありません。

ある日の夜、後回しにしていた家の除雪作業を控え、重たい気持ちを抱えて帰宅すると、道路から駐車場に入る車一台分の幅と玄関先までのアプローチの除雪が終わっていました。

驚いて家に入り、妻にいきさつを尋ねると、隣家の奥さん（民生委員児童委員）が除雪を手伝ってくれたとのこと。急いで隣家を訪ね、奥さんにお礼を言うと、「わざわざいいのに。おじさん（私の亡父）

がいた頃は、うちの方がいつも除雪してもらってたんだよ」と。

コロナ禍、地域でも人と関わる機会が少なくなっている最中での大雪。みんなが大変な状況の中、我が家を気にかけて、労苦を惜しまずに除雪を手伝ってくださったことへの感謝とともに、「お互い様」は時間を超えてつながっていくことを強く実感しました。「ココロでつながる」って素晴らしいと思います。



## 周りの人を思う心

私が担当させていただいている利用者Mさんのお話です。

Mさんは40代の頃、不慮の事故により左足を切断するという不幸に見舞われながらも持ち前の明るさで周囲に元気を与えてくれるムードメーカーです。

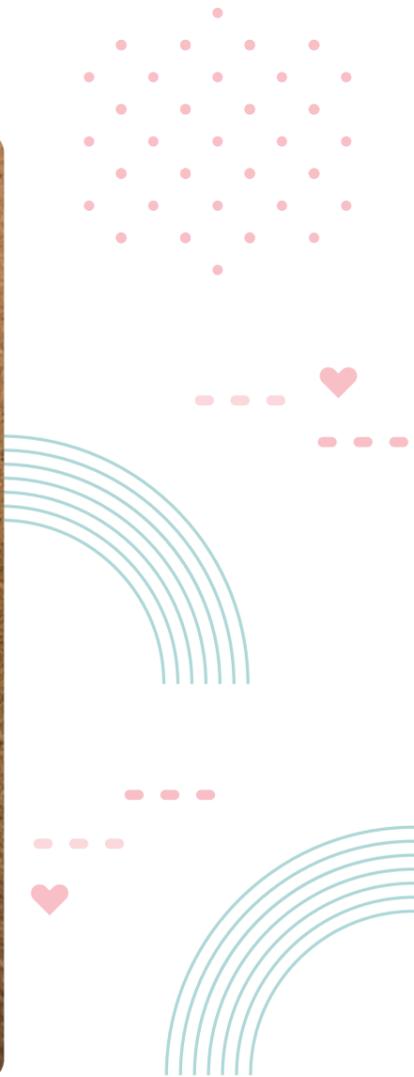
コロナが流行り出して慣れないマスク生活を送る中、デイサービスの利用者・職員全員に彩とりどりのマスクをひとつひとつ手作りしてプレゼントして下さいました。

マスクが不足し材料も手に入りにくい状況の中、たくさんさんのマスクを作って下さり、一生懸命ミシンに向う姿を想像すると、とても気持ちがあたたかくなりました。

私も周りの方々の気持ちをあたたかくできる支援ができるようにがんばろうと改めて感じました。

+  
+

+  
+



林貴子



# コロナ禍での子育てで…

匿名希望

子どもが産まれたのは平成31年4月。出産前から、先輩ママ達に「子育て支援センターや児童館には行っておいたほうがいいよ!」と言われていました。私は育休をいただけたので、生後4・5か月ごろから様々な機関に行きました。子どもは家におもちゃで家族以外の人に遊んでもらい、私自身も専門家に育児のことを相談したり、他のママと話すことができたので、毎日行くところに迷ってしまうほどでした。

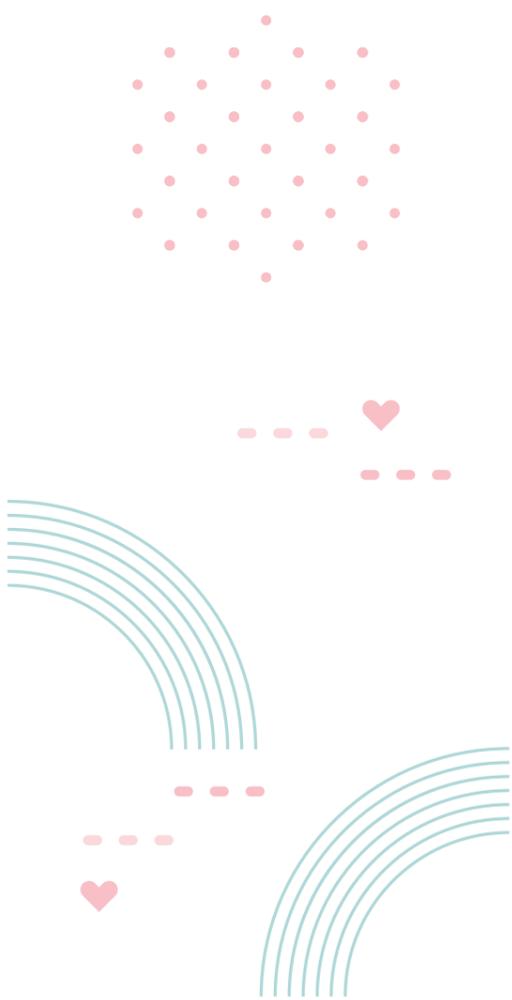
しかし、その後コロナ禍になり、すべての機関が閉所となりました。子どもは1歳になる直前で、動き回りたいた時期なのにどこにも連れて行けません。私は幸い実家が近くにあり、家に閉じこもることはありませんでしたが、県外出身のママ友などは友達にも会えず、特に孤独を感じていたと思います。

そんな時、ある子育て支援センターから「お元気ですか?心配事はありませんか?」と電話をいただきました。気にかけてくれたことが嬉しくて、気持ち

ちが温かくなったのを覚えています。

また、半年ほどしてから久しぶりにセンターや児童館に行った際、先生方が半年間の成長をととても喜んでくださいました。加えて、以前の相談内容をよく覚えていてくれて、「〇〇はどうなった? □□は?」と声をかけてくれた時に、子育ては家族だけでするものではないと改めて実感しました。

今はこども園の先生方に助けていただきながら、日々逞しく成長し続ける子どもとの生活を楽しくしています。



# 感謝

清水喜代江

私は数年前、脳梗塞で入院し、退院してからは、Kさんにホームヘルパーとして週三回程自宅に来ていただいています。家族みんなお世話になりながら生活できています。Kさんには夏の暑い日もマスクをして風呂に入れてもらっています。そして話をいろいろ聞かせてもらっています。病気のこと、人生のこと、Kさんの話を聞くと安心して、毎回楽しみにしています。

リハビリのときは外へ出て歩かせてもらっています。そこで地域の人に会って話をするのが楽しいです。

コロナのワクチン接種も早くからすすめられていたのですが、私は不安で拒否していました。でも、ケアマネージャーや看護師の資格も持っているKさんが、ていねいに説明をしてくださったおかげで、十分納得し、この九月初めにやっと接種することができました。

これからもみなさんに感謝しながら生かさせていた  
だこうと思っています。

G-5

# かわるものとかわらないもの

ペンネーム SW

小学校の登下校の見守り隊の方。コロナ禍でも変わらぬ声かけがある。マスク着用で全体的な表情は見えづらくなったが、子供たちに対する優しい目線が目立つようになった。



G-6

# 今更コロナに気付かされたこと

ペンネーム はまと

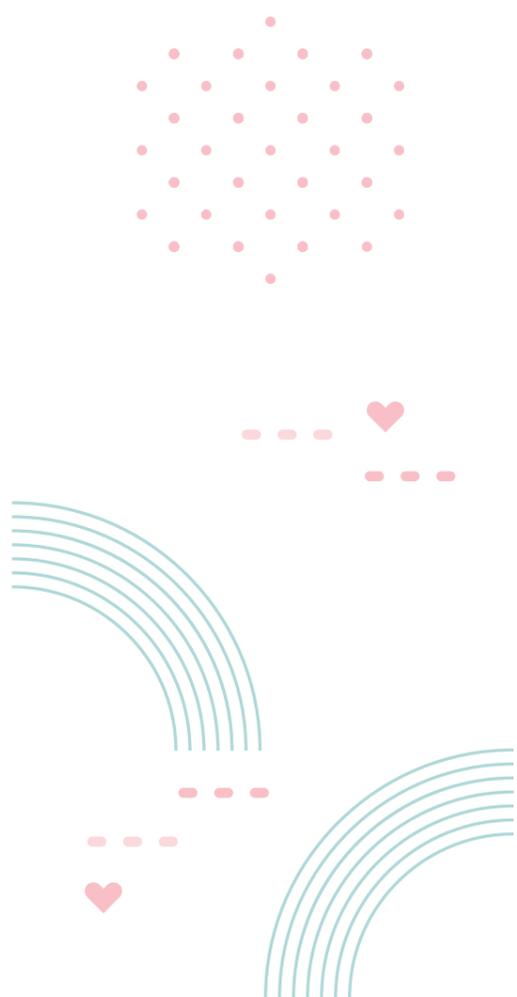
入居者の方が「やっぱり女子はいいよ、やっぱり女子や」親を思って差し入れられる品々やせめて声だけでも連絡をしてこられるのはやっぱり娘さん。

そんな中、ご自宅でお花やお茶を教えられていたT様。T様のお子さんは男の子のご兄弟、福井に息子様しかいないD様。いつも「娘がないから」としょんぼりされていました。どこの施設さんも同じだと思いますがご家族との面会ができません。そこでベランダ越しで顔を見て話していただく事にしました。意外な事に「ベランダ越しでも顔を見たい。」と言われるのは、息子さんの方が多く感じました。花の好きなお母様に帰福する度に花を届けてくれるT様。家族全員の現在を手作りのアルバムで届けてくれたD様。

まるで「ロミオとジュリエット」嬉しそうな親子の表情を見た時。介護職になった頃にラジオで耳にした言葉を思い出しました。「お正月に会いに行くから」もう70を越えた私に何回お正月は来るのだろう。長

生きして100迄生きても30年。あと30回しか我が子の顔を、あと30回しか母の顔を見れないんだ。だから笑顔で、だからせめて声だけでも…。

いい大人の男性が「母の顔を見たいから、ベランダ越しで構わないから」と他人に言うのはどんなに恥ずかしいかと、コロナで面会が制限されてる中でも親子が互いを思い、案じあう姿に胸がきゅっとなりました。



# 被災後の復旧に向けて！災害ボランティア！

越前町  
災害ボランティアセンター

令和3年7月29日に起きた記録的大雨による被害により、越前町内において浸水被害や土砂災害が発生しました。

7月30日には、被害に遭って困っている方を支援するために『越前町災害ボランティアセンター』を開設しました。

開設中は、新型コロナウイルス感染症予防対策から町内在住・在勤者を限定にボランティアを募集。また猛暑の中での活動から熱中症予防対策を徹底しながら、災害ボランティア活動を行いました。

「何かできることはないですか」とボランティア活動を希望する方が次々に現れ、連日になつて継続して参加する方、地元の高校生・大学生、地元企業の方など多くの参加がありました。10日間の開設で224人のボランティア活動者が集まり派遣しました。29件の復旧活動を行うことができました。

被災された住民からは、「一人でどうしようもなく困っていたところ、助けていただき本当に助かりました」「来てくれた方に本当に感謝しています」などの言葉をいただきました。

今回の災害を通して、住民同士で声をかけあつての避難活動やすばやい復旧活動など地域住民同士のつながりを再確認することができました。また、ボランティア活動者や関係機関や団体の協力から人と人が助け合うマンパワーの力強さを感じました。



# 福祉って何？

匿名希望

私が福祉の関係の仕事に携わってまだ日は浅いのですが、コロナ禍になってから「エッセンシャルワーカー」という言葉をよく耳にするようになりました。色々調べてみても明確な定義はないようですが、社会のインフラになくてはならない職種の仕事というような解説がありました。

しかし、人は、特定の業種のみではなくすべての人の働きがあつて生きていられるのだと思います。確かに人の命を預かる医療従事者は重要な職種ということも否めませんし、まずは命あつてのものだと思います。

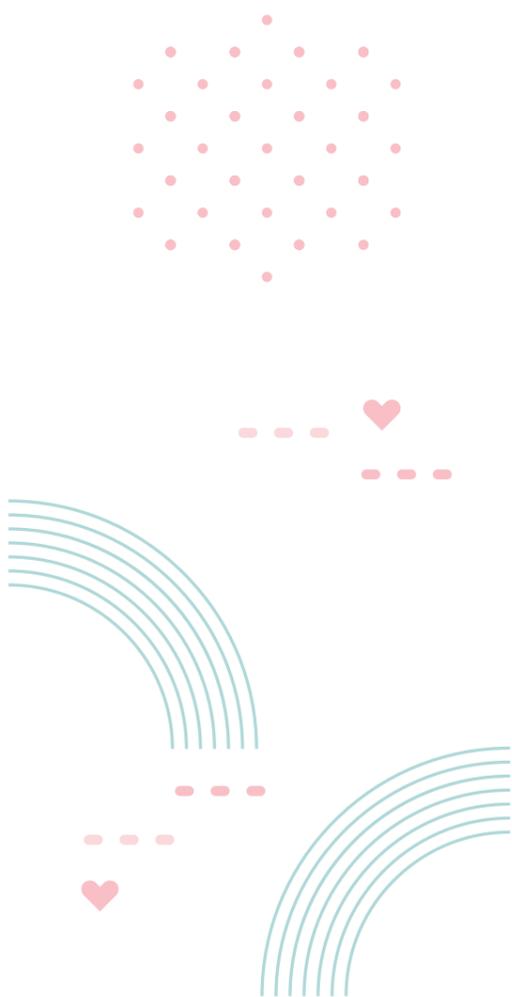
しかし、それに加えて、生きる希望というのは、人と人とのふれあい、コミュニケーションも非常に大切だと感じています。

私も訪問するご家庭の福祉の現場で、たとえば、独り暮らしのお年寄りの場合など、マスク越しであっても、笑顔で「最近、お変わりありませんか？」と直に声をかけ、相手の方から「いつも、気にかけて

もらってありがとう！」と笑顔で返されるとこちらも嬉しくなるものです。

福祉って、ややもすると「give（与える）」のみと思いがちですが、「take（与えてもらう）」もありで、福祉に携わる者にとっても逆に元気がもらえるのではないのでしょうか。

お互いが、温かい気持ちになれることこそ、ソーシャルディスタンスなどが叫ばれる殺伐としたコロナ禍でのちょっとした「福祉」だと感じました。



# 思いやりの「一時停止」

自宅から職場まで、信号機のない横断歩道をいくつか見かけます。しばしばそこに、横断しようとしている歩行者を見かけますが、多くの車はすごいスピードで、停止することなく通り過ぎてしまいます。

私自身は毎回、歩行者優先のルールに則り停止しています。当たり前のことが守られていない現状に悲しくなります。

ただ、そんな中でも、思いやりを持ち、ルールを守り、優しい笑顔で道を譲るドライバーの方もいます。また、譲られた側の歩行者、特に子どもたちは、それを当たり前とせず、ありがとうの気持ちを込めて深々とお辞儀をします。そんな優しさの連鎖を目の当たりにすると、まったく関係のない私まであたたかい気持ちになります。人と人の繋がりが希薄になっているコロナ禍において、思いがけず人のぬくもりに触れることができる、そんな場面が少しずつ増えていくことを願います。



匿名希望